

第1学年「みがく」学習活動案

授業者 神谷 潤

2月16日（金） 1階D室 9:00～9:40

1 活動名 聴きあおう

2 活動について

子どもたちは、入学式からサークル対話を続け、互いの話を聴くことを積み重ねてきた。2学期までは、朝、サークルに集い、話し手の話に耳を傾け、質問する「朝のサークル対話」を中心として取り組んだ。朝のサークル対話は、話し手が話したいことを聴き、聴いた話をテキストにすることばの学びへと展開する。話し手の話に耳を傾け、聴いてみたいことを話し手に尋ねることで話の輪郭を明らかにしたり内容が豊かになったりするだけでなく、他者の質問によって話し手にとっても他の聴き手によっても新しいことがらや感じ方、他者との違いなどに出会う。また、話し手も聴き手に話を聴いてもらい自らの話を掘り下げたり広げたりしてもらうことで安心して他者に自らを開示することができる。こうした聴きあいを楽しみ、朝のサークル対話は、教師のみならず子どもたちにとっても1日の生活に欠くことのできない活動として位置づいてきた。

一方で、他者と共生する教室空間において、子どもたちは自らの新しさと規範意識との間を揺れ動きながら生活している様子が見られる。自らの新しさゆえに規範に基づく判断をせずに行動する姿が見られる反面、これまでの生活経験から、決められたルールを守らない人がいると「〇〇してはいけない」と語気を強める姿があったり教師や保護者など周囲の大人の発言に従属したりする姿がある。こうした新しさと規範との間を生きる子どもにとって学校という社会的空間において他者と共生していくためには、規範意識を育てたりルールに従う姿勢を育てたりすることが重要であるという価値観もあるだろう。

しかし、こうした規範意識やルールといったものは、真理であると言い切れるのだろうか。また妥当であると言えるとしたらそれはなぜなのだろうか。そうした疑問をすでにある社会に新参者として参入しようとする子どもが抱くとは考えられないだろうか。子どもにとっては、こうした疑問を抱くことをあきらめるのではなく他者との話し合いの中で他者とともに規範やルールに対する妥当性や公共性、道徳性を問い直し、自ら判断していく経験を積み重ねることも求められるのではないだろうか。

そこで本活動では、絵本を題材にして他者の意見を聴きあいともに考える時間を設定することにした。絵本は当たり前だと思われることを問い直す機会となりそうなものを選択し、絵本の読み聞かせを経て子どもたちが疑問に思ったことを話し合う活動を展開する。絵本という過去と子どもという新しさの衝突の場としての教室空間で子どもがともに自らを現わしかつ声を交わし合い考える空間に、授業者もともに耳を傾け、思考する時間としたい。

3 学習活動計画（4時間目／全8時間）

絵本の読み聞かせをきっかけに疑問や不思議だと思ったことについて話し合う（毎時、新しい絵本と出合い考える）

4 本時の活動について

（1）本時のねらい

絵本の読み聞かせをきっかけにして、疑問に思ったことについて、互いの意見を聴きあい考える。

（2）予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1 絵本と出会う（絵本の読み聞かせを聴く）	・絵本は、道徳的な教訓を与えるようなものは避け、子どもが自らの唯一性を現すことができるような題材を選ぶように配慮する。
2 絵本の感想を共有した後、問いを立てて互いの考えを聴きあう。	・子どもの感想に基づき、子どもが疑問に思っていることから話し合うことができるよう配慮する。
3 聴きあったことの現時点でのまとめをする	